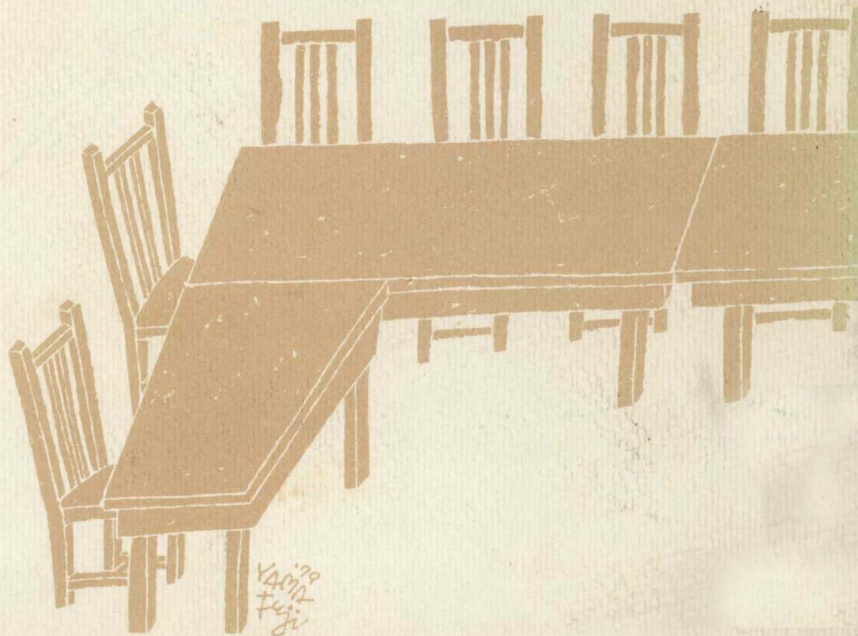


筒井康隆
劇場

浮か出る男 以人の

筒井康隆



Yamato
Fuji
ji

筒井康隆
劇場

浮かぶる男
一人の

新潮社

筒井康隆

筒井康隆
劇作
男の浮城

一九七九年二月十日発行
一九七九年三月十日二刷

著者 筒井康隆

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

振替東京四一八〇八

印刷 株式会社金羊社

製本 株式会社大進堂

定価 九〇〇円



© 1979 Yasutaka Tsutsui Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

12人の浮かれる男	5
情報	71
改札口	79
将軍が目醒めた時	103
スタア	143
あとがき	262
初演記録	264

裴頓／山藤章二

筒井康隆劇場

12人の浮かれる男

12人の浮かれる男

一幕

登場人物

陪審員一号（陪審員長。私鉄の駅員）

同 二号（内科の医者）

同 三号（生命保険会社の課長補佐）

同 四号（喫茶店経営者）

同 五号（銀行員）

同 六号（教材卸商）

同 七号（商社会社の社員）

同 八号（煙草屋の親爺）

同 九号（ガソリン・スタンドの男）

同 十号（小学校の教頭）

同 十一号（散髪屋）

同 十二号（小柄な男）

幕あがると、裁判所の陪審員控室。粗末な会議用テーブルがコの字形に並び、椅子が十二脚。ストーヴ。

廊下へのドア。

ドアが開き、陪審員一号（小肥りの中年男）登場。

一号　うう。寒い寒い。裁判所ってものがこんなに寒いところとは思わなかった。

続いてがやがや喋りながら、陪審員たち全員が登場。

七号　（金縁眼鏡をかけた若い男）裁判所だってお役所なものな。お役所なんて、みんなこんなものさ。暖房の設備なんてもものには金を使わないんだ。ふん。国民を馬鹿にしてやがる。九号　（色の黒い青年）だけど、この部屋は特に寒いぜ。

七号　（九号を軽蔑の眼で見te）だから言っただろ。ここは陪審員室なんだぜ。だから国民を馬鹿にしてやがるって言ったのさ。

九号　（ストーヴの前へ行き）また消えてやがる。（火をおこしにかかる）

十一号（頭をボマードでかてかに光らせた三十七、八の男）こんなに結果のはっきりした

裁判というのは、どうも面白くありませんなあ。

四号（チェックの背広を着てパイプをくわえた、一見文化人風の男）あの弁護士がよろしおました。あの被告がどれだけ親孝行やったかを、あれだけ証明してしもうたら、こらもう、無罪にせな仕様ない。

一号 まあ、皆さん、掛けませんか。わたしが陪審員長ということになっておりますので、まあ、この真ん中の席に掛けさせて貰いますが、皆さん、番号順にひとつこつちから、ずうとこう、お掛けください。

一号、舞台正面中央の席に掛ける。以下、下手へ二号、三号、四号、五号、六号、七号と順に掛け、八号は上手の端、以下、下手へ九号、十号、十一号、十二号と順に掛け、中央の一号に至る。

一号（ストーヴにかじりついている九号に）さあ。あなたも掛けてください。

七号（馬鹿にしたように）まあ、いいじゃないですか、この人は。一生けんめい火をつけてこの部屋を暖めようとしてくださっているんだから。あはははは。

五号（神経質そうな蒼白い顔の青年）でも、どうせそんなに長くこの部屋にいるわけじゃないでしょう。無罪ってことはわかりきってるんだし。（腕時計を見る）ぼくはひとと五時に待ちあわせてるんですが。

七号 ほう。恋びとと、ですか。

五号（睨みつけ）いえ。婚約者です。

七号（大声で）それはご馳走さま。あははははあ。

九号（ストローヴに小さなシャベルでバケツの石炭を抛り込む。がちやがちやと音がする）この石炭、湿ってやがる。

一号（立ちあがり）ええと。わたしは私鉄の駅員をしておりまして、こういう會議には馴れとらんですが。（丸刈りにした胡麻塩頭を搔く）まず、おひとりずつ、ご意見を述べていただきますでしょうか。

五号 その必要があるんですかねえ。無罪に決まっているのに。

四号 討論の必要は、あると思いますなあ。あんたかて、見てなはったやろ。傍聴席に仰山来てたあの記者やらカメラマン。あの連中は被告を取材に來たんやない。わたしら陪審員を取材に來とりましたんやで。なにしろ日本で陪審制が採用されてはじめての裁判やさかいにな。

十号（しかめ面をした初老の男）いや。はじめてではないのです。昔は日本にもあった。しかし昭和十八年にいったん停止となり。

四号（大声で）ま、そんなことどうでもよろしがな。とにかくわたしらは今、日本中の注目を集めとるんや。そない簡単に判決を出してもたらあんだ、面白味があらへん。そうですやろ。わたしはまあ、しょうむない喫茶店を經營してるだけの人間やけど、陪審員になるなんてことは、平凡な人生で二度も三度もあることやない。せっかく国民の注目を集めとるこの陪審制再開の第一回の裁判の判決をやね、二分か三分の會議で出してしもたら、面白味が。

十号 さっきからこの、やたらに面白味、面白味と言つとられるようじゃが、ちと不謹慎では
ありませんかな。裁判は面白がつてやるものではありませんぞ。

七号 しかし、面白くないといえは嘘になるでしょう。(十号に)失礼ですが、あなた、お仕事は。
十号 (むっとしながら) 小学校の教頭をしております。

七号 (大きくうなずき) なるほど。では裁判所なんてところへお越しになるのははじめての
筈だ。わたしは商社会社の社員をやっています、民事訴訟では何度か来たことがあります。
しかし刑事訴訟はこれからはじめてです。やっぱ面白。たいへんに面白いですな。
これが。(挑戦的に十号を見つめる)

八号 (ずつと眼を丸くしていたが、感にたえぬように吐息をつき) こんな面白いこと、わし、
初めてだよ。わし、煙草屋やつとるんだがね。生まれてこのかた、こんな面白いことに出
くわしたの初めてだよ。世の中にこんな面白いことがあったんだね。

十号、苦虫を噛みつぶしたような顔をし、七号はにやにやと笑う。

一号 (頭を掻き) ええと。それではですな。討議をするか、それともすぐ評決に移るか、そ
いつを決めましようかな。ではまず、すぐに評決はせず、それぞれの意見を述べて討論を
しようではないかというかた、ひとつ、手をあげていただけますか。

二号、三号、四号、六号、七号、十二号が手をあげる。

一号（大声で）よござんすか。よござんすか。すぐに評決はしない、というひとですよ。
八号 あ。そうか。（手をあげる）

十号、十一号も手をあげる。一号も、立ったままで手をあげる。

四号（十号に）はほう。あんたかて、討論することには賛成ですか。

十号 面白がって議論するためではありません。たとえ無罪であることがどんなにはつきりしていようと、殺人事件という重大な裁判には、慎重すぎるということは絶対にない。討議に討議を重ねることがあくまで。

七号（せせら笑い）ま、自分を納得させるのはあとでもいいでしょ。

十号（睨みつけ）何をいうか。わたしは真面目に言つとるんだ。

一号（宥める）まあまあ。（ストローをいじりまわしている九号に）あなたあなた。手をあげるのですか。あげないのですか。

九号（見まわし）え。おれ。おれ、どっちでもいいよ。（挙手が圧倒的に多いと気づき）じゃ、手をあげとこう。（手をあげ、すぐに手をおろし、またストローに取り組む）火つきが悪いなあ。

全員、ただひとり挙手していない五号の方を見る。五号、ちらと腕時計を見、しぶしぶ手をあげる。

一号 えと、皆さんも一度、はっきりと手を。はいはい。もう結構です。ええと。それではまあ、ご覧のような結果ですので、ひとつ順にご意見を述べていただくことにしましょう。えと。番号順に行きますか。陪審員一号というのは、これはわたしですので、議長ですから自分の意見はあとまわしにさせていただいて、それではまあこちらの、二号のかたから順に願います。あ、それからあの、わたし腰を痛めておりますので、失礼ですが掛けさせていただきます。(腰をおろす)

二号 (立ちあがる。肥満した赤ら顔の男で、始終苦しうに肩で呼吸している) ええ。わたしは内科の医者をやっております、楠本という者でございますが、今度のこの裁判では。七号 あ。ちょっと議長。ここでは自己紹介は必要ないと思うんですがねえ。単に番号で呼ぶだけの方が、先入観なしに意見が拝聴できるわけで、かえって正確な判断が。

二号 いやいや、わたしが自分の職業をいったのは、あとでわたしが述べる医者としての意見に関係してくるわけなのです。あなただってさっき、自分が商社の社員であるとおっしゃったじゃないですか。

七号 (声を高く) それは別の問題でしょ。あなたはお医者さんだ。そうご自分でおっしゃった。医者は、そりゃあ、たしかにインテリですよ。医者だといえはほかのひとたちは、インテリだと思い、たしかにあなたの言うことを謹聴するでしょう。

二号 (興奮してどんとテーブルを叩く) 謹聴させたいために医者だと言ったわけじゃありません。

七号 (ますますヒステリックに) たえそうでなくても、医者という専門家としての意見を述べようとしたわけでしょうが。そうでしょうが。しかし専門家の意見は、ここでは不必

要だ。われわれはみな陪審員であって、専門家と素人の区別はなく、意見の重みは平等でなければならぬ。そりや医者とはしかに人間に関する、まあ、ある意味での専門家だが、しかしここでは（興奮して立ちあがり、二号に指をつきつけ）この席では、専門家としての意見を振りまわさず、もっと謙虚にですな、一陪審員として発言を。

十号（大声で）やめなさい。見苦しい。

七号、思わずとびあがり、絶句する。

十号 たまたま陪審員の中に専門家がいた。われわれはこれを幸いとし、そのご意見を拝聴する。これこそ謙虚というものではありませんかな。

十一号（迎合的に）その通りですね。さすがは教頭先生だ。おっしゃる通りだと思います。賛成。賛成。はははは。ねえ皆さん、その通りですね。

四、五人、大きくうなずく。七号、不貞腐れて乱暴に腰をかけ、ふんぞり返る。

二号（苦しげに呼吸しながら一号に）喋ってよろしいですか。

一号 あ。どうぞどうぞ。

二号 今度のこの裁判の被告は、たいへん真面目な男で、近所でも評判の親孝行だったということです。しかし一方、死んだ父親というのは、多くの証言ではたいへんな酒飲みで、これはむしろアル中に近かったということです。これに關してですが、実は商売柄わ

たしのところへも、アル中の父親を持った息子が困り果てて相談に來たことは何回あります。その息子たちを観察するにですな、真面目で親孝行だと世間から思われている息子ほど、実は父親への憎しみを強く心に抱いている場合が多い。父親のことを話しているうちに興奮してきて、殺してやりたいなどと口走る男もおります。で、あの被告はちょうどそういった連中とたいへんタイプが似ておるのです。あの腕ききの弁護士が、いかに被告が親孝行であったかを証明しても、いや、むしろ親孝行であったという証拠を出せば出すほど、わたしはあの被告が父親を殺したに違いないと思うのです。いや、思っていたのです。(残念そうに吐息をつく) しかしあの弁護士は、被告のアリバイをあんなに確実に証明してしまった。やはり無罪、というほかはありませんな。(大儀そうに腰をおろす)

七号 (ややあって、突然) あははははは。なあんだ。それだとちっとも専門家としての意見じゃないじゃありませんか。いや、失礼失礼。(わざと陽気に) わたしはまた、あなたが医学的な立場で何か発言なさるのかと思ったのであんなに反対したのですが、今のお話なら、まあ素人にだって、誰にだって観察できることで、たいしたことじゃない。いや、さっきはあんなに反対してすみませんでした。なあんだ。そういうお話だったのですか。あははははは。あははは。あはは。あは。(誰も一緒になって笑おうとしないので、ますます笑いを中断する)

二号 (腹立ちを押さええかね) だいたい君は。

十一号 (雰囲気を変えようとし) なるほど。先生のおっしゃる通りかもしれませんねえ。かえってわたしの家みたいに、わたしと息子がいつも怒鳴りあいの喧嘩をしている方が、ほんとは仲がいいんでしょうな。なに、わたしが息子に家業を継げって言うたび喧嘩になる